

St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学図書館の構想とその実現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): library construction, educational fundmental concept 作成者: 助川, 尚子, 六本木, 淑恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/338

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



聖路加看護大学新図書館の構想とその実現

助川 尚子¹⁾ 六本木淑恵²⁾

要 旨

本稿は、1996年8月に新校舎落成と共に誕生した本学新図書館の基本構想の立案からその実現までのプロセスをたどり、本学の歴史、教育理念、教育課程の変遷がどのようにその中で具現されているのか考察したものである。

キーワード

新図書館、図書館建築、教育理念、基本構想

I. はじめに

1996年8月、63年ぶりの本学の新校舎への移転に伴い、現図書館もその中に誕生した。ソフト・ハード面でも従来より飛躍的に整った環境の中で、ますます増加する本館の利用者は、日々そこで提供されるサービスをごく当たり前のこととして享受している。多くの関係者の知恵と情熱の賜物である本館は、発想の源に本学の歴史や教育理念をふまえ、先駆的な看護図書館として、過去、現在、未来を見すえて基本構想を練りあげ、その具現化に近づこうということにおいて、綿密で正統的な経緯を辿った誠にユニークな作品といえよう。今その軌跡を巡り、どのようにして現在の図書館が誕生したのか記録に残しておくことは、本学の歴史を語るうえでも貴重な資料になると考え、余り時を経ないうちに本稿をまとめることとなった。本稿が21世紀の何時の日か次なる発展をするときの参考に、あるいは、新たに図書館の新設を計画中の、他の看護関連の教育施設の参考にもいささかなりとも資することになれば幸いである。

II. 本学の教育理念と図書館

1) 沿革

本学の母体は、1920年ルドルフ・トイスラー博士によって創設された聖路加病院高等看護婦学校である。ちなみ

に同年は、ナイティンゲール生誕100周年という記念すべき年である。米国の宣教医師であったトイスラー博士は、来日後、日本の医療が、高い水準にあるにもかかわらず、看護婦のレベルが低く、医師の補助者のような役割しか担っていない現状を見て、米国の最高の看護教育と同じ教育を行う目的で、高等看護婦学校を築地に創設した。当地は古くは西洋学術書の翻訳、蘭学事始めの誕生の地でもあり、福沢諭吉の慶應義塾の前身もここに開設された、歴史的に由緒深い学術・文明の土地である。一帯は明治時代からの居留地であり、SLタワーの辺りには、米国領事館もあった。

そのような場所に、看護をひとつの独立した職業として確立させ、教養のある看護婦の育成をめざして本学の母体が生まれた。本学は、聖路加国際病院設立の理念「神の栄光と人類の奉仕のために」と精神を一つにして、病院とは独立した学校となった。

「キリスト教の博愛の精神」と「アメリカ合理主義」の理念のもと、R. B. トイスラーが、本学校長をつとめ、米国人のミセスアリス・C・セントジョーンズが初代主事に就任した。

1920年にスタートした本邦初の看護学校はその後、第2次世界大戦などを経て、次のように発展してきた。

* 聖路加国際病院高等看護婦学校	1920年
聖路加女子専門学校	1935年
“ 短期大学	1954年
“ 看護大学	1964年

1) 聖路加看護大学 教授（英語 前図書館長）

2) 聖路加看護大学 主任司書（図書館）

編入制度	1976年
大学院修士課程	1980年
* “ 博士 ”	1988年
科目等履修制度	1994年
* 学士編入制度	1997年
* CNS (専門看護師)	1997年

(* は本学がはじめて行ったもの)

英国ではナイティンゲールによって、1850年に聖トマス病院に附属して最初の看護学校が創設されたが、看護学校も図書館を備えるべきということは、この頃すでに述べられている。本学も1935年専門学校としてスタートした頃より、独立した図書館(図書室)を持っていた。聖路加国際病院と大学がちょうど姉妹関係にあるのと同様、その後、看護大学図書館は病院図書館と深い連携をもちながらも、独立した形態をとってきたのは、管理は別にながら機能は一つにという創始者の精神に基づくものといえよう。

2) 教育理念

以上のような歴史を辿って発展してきた本学の理念は、『新約聖書』『ピリピ書』第1章9節～10節にある次のことばにうかがうことができる。「わたしはこう祈る。あなたがたの愛が深い知識とするどい感覚において、いよいよ増し加わり……」(「それによって、あなたがたが何が重要であるかを判別することができますように……」という句がこのあとに続く)。現在の理念をみると具体的には、次のようになっている。

聖路加看護大学はキリスト教精神に基づき、看護を志す人々が、より豊かな知性と感性を共に追求し、看護専門職者として成長することを目的としている。

本学の教育は、学生が、各個人に付与された資質を心身両面にわたって調和よく発展させ、知的能力と判断力を高めるとともに、道義的・倫理的価値観を形成するよう支援する。自他を問わず人間を愛し、相互に理解し合い、人種・信条を問わず人間社会の種々の領域に積極的に参加し、看護を通して公共の福祉を推進する人材となるよう支援する。

また本学は、社会の要請に応えて、教育と研究を通して看護学の発展のために努力を続け、その成果を看護教育と看護実践に役立てることによって、広く社会に寄与することをめざしている。

本学では看護を、人間の健康に焦点を当て、生活の全面に働きかけ、各人の到達しうる身体的側面と心理・社会・霊的側面の最高位、すなわち最適健康状態を生み出すように援助する働きととらえる。看護専門職者が看護

を必要とする人々との援助関係を基盤に、看護学の知識と技を用いて、個人・家族・地域社会が、それぞれの可能性を最大限に発揮できるように援助することを願っている。

III. 本学図書館の歴史

「知性と感性と愛のアート」(大学入口礎石)に集約される理念のもと、看護界の先駆的存在として、76年の歴史をもつ本学は、図書館も、そのプログラムに沿って、教育研究のニーズに対応し発展してきた。

1) 図書室時代

専門学校時代以前には旧校舎の地下の一室や1階奥左手の中庭に面したA教室が[約76㎡]、図書室として使われていた。旧校舎への移転の2年後1935年に開設された専門学校時代から短期大学時代の約30年間は、A教室が図書室となり、地下は書庫として使われていたようである。その後、1964年に四年制大学への昇格とともに学生数も増え教育のニーズに応じた図書の整備も急務となった。

2) 最初の図書館

このニーズに応じて本学同窓生は、創立50周年(1970)の記念事業として募金を行い、旧校舎2階に学習ラウンジ、図書室を含め、一層約300㎡の図書館第一号が寄贈された。当時、学内唯一の冷暖房装置を備えたものであった。司書も一人から二人に増員された。

3) 新図書館へのニーズ

第一号図書館は、その後25年間活躍するわけであるが、前述の如く、開設以降、修士・博士課程、編入学、科目等履修に加えて、学士編入制度、CNSコース等のスタートも目前に、教育プログラムも多様化してきた。教員数も50名近く増え、学部、博士・前後期課程を含めて学生数も360名(学部290名、研究科68名)に達してきた。その他のプログラムのスタートとともに、病院、外部の訪問者も増加し、今や旧図書館は手狭となった。蔵書の収納、ことに歴史的貴重書の保存、利用提供(地下の旧図書室の閉架書庫は整理も不十分なまま、日の目を見ない状態で保存)の必要性が生じてきた。また、旧図書館は全くの開架式のため紛失図書の増大を防止するためのBDS: Book Detection System(無断持ち出し監視装置)の設置も望まれていた。これらを含めた急激な情報革命への対応としてのシステム化が火急の課題となってきた。

IV. 図書館設計検討の経緯

大学の建築に関する検討は10年ほど前から開始されており、図書館に関しても総面積は一応の案が示されていたが、施設の検討が具体化したのは、1990年7月からである。当時の担当理事であった故檜垣名誉教授の諮問により、必要面積を算出した。『大学設置基準』を下回ることなく、『私立大学図書館改善要項』、『大学図書館施設計画要項』等を参考にして試算した結果、延べ面積2,452㎡が出された。これは、所蔵収容力を20万冊と見込んだ上で、理想的な図書館を考えて出来得るかぎりの要素を盛り込んだもので、大学の総面積からみて実現可能な数字ではなかったが、この時に行なった必要面積の算出の作業は、その後の修正案作成においても大いに役立った。各スペースの面積の算出にあたり単位空間の割り出し方は、日本建築学会編の「建築設計資料集成」を参考にした。

1990年10月には、総面積を1000㎡という前提で、収容力を10万冊とする修正案を提出した。1992年10月には「新図書館建築に関する要望書」を提出したが、必要面積に関してだけでなく、立地、構成、図書館の各スペースの関係等にも触れ、図書館機能全体に関するものであった。

また、この図書館での作業と平行するように、7月に大学より新図書館の建築について考えるよう委託されたのを受けて、図書委員会の下に新図書館の建築を考えるワーキンググループが作られ、全学として図書館に望むものが検討された。その結果、10月に「聖路加看護大学図書館のめざすもの」がまとめられ、答申された。

「聖路加看護大学図書館のめざすもの」

聖路加看護大学図書館は、看護実践にかかわる基本的知識ならびに現在行なわれている最新の看護と保健・医療・福祉について把握できるような情報を収集し、利用者に提供する。また、豊かな知性と感性を備えた人間性を育み、広い視野に立って学問・研究の基礎を身につけ、看護の近接領域においても基本的知識と最新情報を知り得るような方法を提供する。そして自立的に、安心して、学習したいという意欲を持ち得るような快適な環境を確保し、提供する。

当館は、看護学としての教育、研究の最新情報の充実に努める。そして、利用者がそれらを円滑に享受できるよう援助し、看護学の向上に寄与する。また、本学の伝統を踏まえ、看護学の歴史的資料を保存、提供する。

当館は、提供し得る範囲内で開かれた図書館として、看護学研究成果を広く還元し、社会に貢献する。

これらを実現するため、あらゆるメディアを含む広範囲な情報を扱い、これらを有機的に組織化し、提供するように努力する。

この「聖路加看護大学図書館のめざすもの」は、以下に挙げた『実現させるための要件』という形で、前述の「新図書館建築に関する要望書」に盛り込まれていった。

『聖路加看護大学図書館のめざすものを実現させるための要件』

- ・ 雑誌架、書架スペース（開架、閉架）の確保
- ・ 機能的な書架の確保
- ・ 貴重書架の設置
- ・ 十分な閲覧席数の確保と心理的圧迫のない配置
- ・ レファレンスカウンターの設置
- ・ 所蔵資料や情報検索のためのスペース確保
- ・ 情報検索のシステム及び機器の導入
- ・ コンピュータによる全所蔵資料の有機的組織化
- ・ BDS : Book Detection Systemの導入と利用者用ロッカーの確保
- ・ 空調、照明等の環境の整備
- ・ 利用者個人のプライバシーが守られる構造
- ・ 学外者の利用に対応できる構造

1993年から1994年にかけて設計案を実際に図面化していく作業が進められ、1994年の大学幹部会への「新図書館設計プラン」説明を経て、ほぼ現在の形が決定されていった。この時点で総面積は840㎡とされたが、実際には窓際の空調機の設置などによって縮小され、完成時には760㎡と少なくなってしまった。

1994年5月、10月には正面入口上のデザインやステンドグラスに関する話し合いが、制作者の鈴木（本学卒業生）、戸田両氏も含めて行なわれた。この詳細については後述することとする。

1994年から1995年にかけては、照明や空調などの設備面も含め、細部にわたる具体的な検討が始まり、大学幹部会、実施設計を行なう大成建設との話し合いにより詰めの作業を行なった。

数回の確認を経て、1995年の9月に最終図面を提出し、一応の区切りをみた。また、この両年には常設の図書委員会とは別に、大学の新校舎建築委員会の一つとして新校舎図書館委員会が設置されている。

V. 図書館内部設計と備品の選定

内部のレイアウトについては、まず、図書館に求められる必要な機能を考え、それを満たすスペースをどのように配置すれば、使いやすいものとなるか考えることか

ら始めた。その際、利用者にとっては使いやすい動線になるよう、職員にとっては現在の少ない人員でも管理しやすいことなどが考慮された。2階と3階を内階段でつなぎ使用することが早い段階で決められており、物理的に動かせない空間の中へ、それぞれのスペースの関係性を考えながら必要なものをどのように配置するか苦労した。その際、図書館用品を扱っている業者（丸善、紀伊国屋、キハラなど）のレイアウト案などが大変参考になった。

大まかな配置が決まったところで、そこに必要な備品の検討に入った。書架や閲覧席などの家具は、旧校舎時代のものを出来るだけ使う方針にしたが、旧図書館時代は書架など作り付けのものが多く、結果的には利用者が使用するものは大部分新規に購入することになった。

書架については、阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、少しでも耐震性の優れたものをということで、日本ファイリング製のものを採用した。閲覧席やAV席、検索台、椅子等は、少なくとも50年は使用できるものとして、他の図書館でも質の良さに定評のある天童木工のものとした。サイズ、デザインなどは、使い勝手を考え、色々な要望を盛り込んでのオーダーメイドである。特にOA機器などを置く検索台やカウンターなどは、機能の面で不自由なく使えるようにするため、かなりデザインを工夫することになった。

最終的な配置と各スペースの概要は下記の通りである。

総面積 760㎡

2F 460㎡, 3F 300㎡

閲覧席 68席

2F キャレル10席・4人掛40席

3F キャレル18席・グループ学習室内 10席

検索端末 7台（2F 6台, 3F 1台）

AVブース 8席（1人掛4席, 2人掛2席）

AVルーム 2室（各5席）

コインロッカー 100名分

主なスペースの詳細を以下に述べる。

(1) 入口

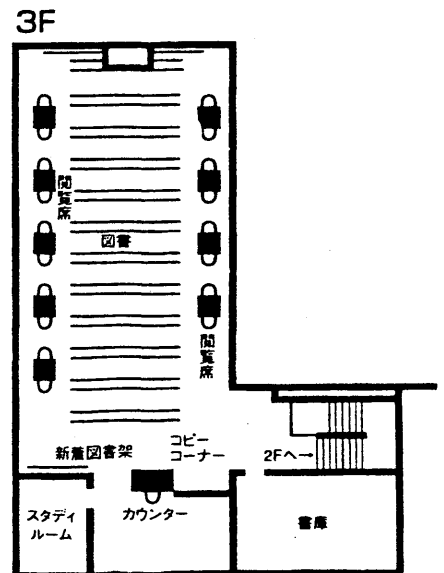
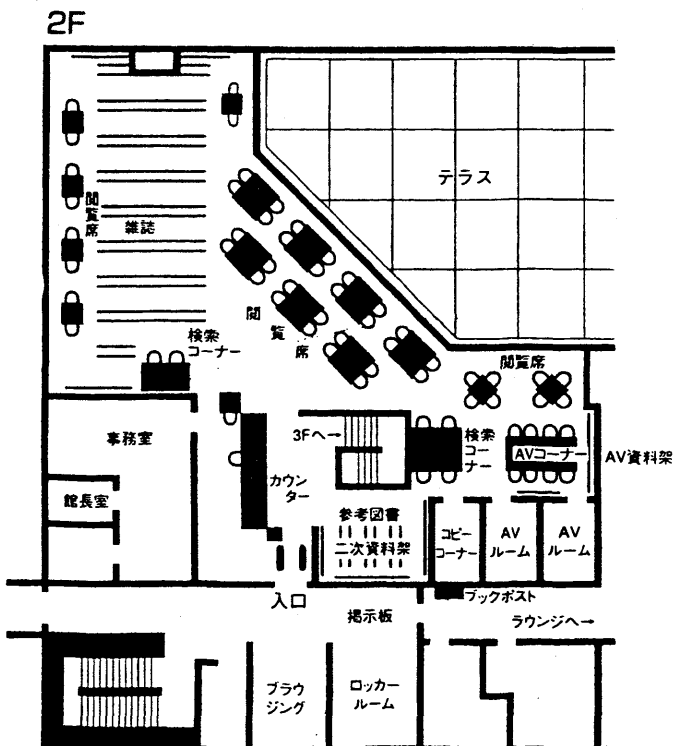
BDS : Book Detection Systemを導入。これにより、旧図書館時代から懸案であった無断持ち出しが防止でき、利用の自由が保障がされた。

(2) ブラウジングスペース

新聞、ニュース類の閲覧のためのスペース。フロアの構造上、配置は図書館の外になったが、図書館機能の一部を担っている。旧校舎時代の椅子を使用している。

(3) ロッカースペース

コインリターン式のロッカーを設けてある。



学生は個人のロッカーを持っているが、通常バックなどは持ち歩いているので、荷物による閲覧席の無駄な占領などを防止するとともに、図書館の利用をしやすいためである。また、卒業生をはじめとする学外利用者に対しても必要となる。

(4) 閲覧スペース

旧図書館時代はスタディールームを加えた閲覧席数が54席であった。これは全学生数の約15%で、「私立大学図書館改善要項」の10%を上回る数値ではあったが、実際にはこれでも不足であったので、25%程度になるように考えた。

机の大きさは、4人掛机、キャレルデスクとも、90cm幅である。キャレルデスクは、120cm程度の幅にしたかったが、通路幅が狭くなってしまうため断念した。将来のノートパソコンなどの利用に備え、電源と情報コンセントを設置した。木製の机にこのようなコンセントを組み込むノウハウは家具メーカーにもなく、机上にすっきり填まるようにするために苦労した。

4人掛机は向かいに仕切りを設け、私語がしにくいようなデザインにした。

配置は、出来るだけ書架に近い場所になるよう心がけた。

3階には、図書館の資料を使ってグループワークを行なうためのスタディールームを設けた。ビデオ等の利用も可能なように配線も考慮してある。この部屋の机は、通常は楕円形の大型テーブルであるが、使用目的に応じて、丸と四角の2つのテーブルに組み合わせさせて使えるように工夫してある。

(5) 書架スペース

館内で最も広いスペースを占めるのは書架であるが、2階に1万5千、3階は開架に2万5千、閉架に2万の計6万冊が収容できるように考えられた。現在、蔵書冊数が5万冊であるので、将来、蔵書量が増加すること、書庫拡充の可能性の低さを考えれば、もう少し多くしておきたかったが、図書館の総面積が押さえられているので、これが限界というところであった。

2階の開架書架には、雑誌のバックナンバーを収容してある。旧館時代はスペース不足のため、一部を閉架にしていたが、すべて開架とした。頻繁に利用される過去10年のものとそれ以前のものに分け、和洋別に誌名のABC順の配架となっている。

和雑誌はB5サイズで段数を考えていたが、それより大型のものも少なくなく、結局すべての段をA4サイズに合わせた。予定の収容冊数をかなり下回ってしまい、2、3年後には増加分の配架場所を考え

なければならない状況である。

3階の開架書架には、単行書が配架されている。一番良く使われる看護学の図書を手前に、医学関係、その他の分野の図書が和洋の別なく分類ごとに並んでいる。こちらも当初はB5サイズで段数を考えていたが、洋書など大型の本も多く、すべてA4サイズに組み直した。

書架の間隔は、あまり広いと収容力が落ちてしまうので、110cmにしたが、使いやすさの点ではもう少し広くとりたかった。

3階の閉架書庫には、電動式の収密書架を採用した。収密書架は、利用者が頻繁に使う開架書架には向かないが、利用の少ない閉架書庫では、収容力を大幅に高めることになり有効である。閉架書庫の一部に鍵を付け、貴重書を置くスペースとした。書庫内には貴重書などもあるので、除湿効果を高めるため棚板一枚一枚に調湿ボードを入れてある。

阪神・淡路大震災の教訓から、開架書架では、書架を床で固定し、頭部を繋ぎ合わせ、閉架書庫では、棚の後ろ側にはすかいを入れるなどの地震対策をした。

(6) 雑誌スペース

雑誌の当年分のものは、表紙が見えるタイプの雑誌架を使用。大部分は新規購入だが、一部旧図書館時代のものも使用している。旧図書館時代は雑誌架が少なく、1ボックスに2〜3誌の雑誌が混在しており、探すのに大変不便であったので、1ボックス1タイトルとなるよう棚数を確保した。

配架は、和洋別に誌名のABC順である。

(7) 参考図書・二次資料スペース

旧図書館時代、閲覧室内や目録室、スタディールームに分散していた調べもののための資料をこのスペースにまとめた。旧図書館時代の辞書架、低書架を使用している。

(8) 検索スペース

図書館の所蔵資料や二次資料のCD-ROM、インターネットなどの外部データベースを検索出来るよう、コンピュータの端末を6台設置した。

配置場所は、当初カウンターに近い場所が良いということで入口脇を予定していたが、パソコンのディスプレイから出る電磁波がBDSに影響を与えるということで参考・二次スペースと入れ替え、階段後ろになった。しかし、この場所はカウンターからは死角になってしまい、職員のアドバイスを必要とする場合には不向きなので、4台だけをここに置き、2台はカウンター脇にと分けて設置した。

このスペースは、コンピュータやプリンターのケー

ブル等が多く使われるため床上げの希望をしたが、コストがかかることもあって実現できなかった。コンセント位置や検索台のデザインを工夫することによって対応している。

二次資料のCD-ROMには、CINAHL, MEDLINE, Psyc-LIT, 医中誌, 雑索などがあるが、このうちCINAHLは、学内LANを経由して複数の端末から検索できるようになっている。また、図書館資料の検索も同様の利用ができる。3階にも業務兼用機であるがカウンター上に1台あり、CINAHLと所蔵資料の検索ができるようになっている。

新図書館移転を機に図書館システムを導入したが、詳細については後日の報告とする。

(9) AVスペース

2室のAVルーム間の壁は可動式。必要に応じて1室にできる。中の椅子は旧校舎で使用していた肘付き椅子。

機器は、利用を考え組み合わせしており、ブースでは、ビデオ、カセット、CDの利用が可能、ルーム内では、ビデオ（全世界対応もある）、LDの利用が可能である。

このスペースも検索コーナー同様の理由で床上を希望したが、実現出来なかったため、AVブースでは、机の真上にコンセント位置がくるよう細かく指定し、機器の配線が表に出ないように工夫した。利用しやすいようにビデオなどの資料の書架も近くに設けてある。

(10) コピースペース

資料が2階、3階それぞれにあるので、各階それぞれの利用を考えスペースを設け、1台ずつ設置した。

2階は、防音のためパーティションで間仕切りしてある。

この2台は図書館資料の専用機ということで、個人の複写物は館外の他の機械を利用するという前提での台数の設定である。しかし、移転後、学生より「自由に使える機械が図書館外にほしい」という要望が出された際、学内の台数を増やせないという理由から、3階のコピー機を館外へ出すことになってしまった。館内にコピー機が1台というのは、資料を利用する上で大変不便である。

(11) 事務スペース

事務スペースには、カウンター、事務室、館長室、職員ロッカールームなどを含んでいる。

2階のカウンターは貸出・返却やレファレンスなどの多目的な業務に対応できるようにした。3階に

も必要に応じて業務が出来るようなカウンターを設けてある。2・3階間の資料の搬送のためリフトを設置している。

カウンターも閲覧席同様木製にしたが、パソコンのケーブルなどが当初考えていた以上の太さで、すっきり収納させるため家具を削り直す作業をした。事務室は、コンピュータなどの機器や受け入れ待ち資料などが思いのほかスペースをとってしまい、実際に事務を行なう場所が狭くなってしまった。利用者のためのスペースを広くとるため、個人机などは一切配さず最小限の大きさにしたのだが、もう少し充分な広さをとったほうが事務効率上は良かったようだ。事務室とカウンターの間はガラス張りにしてあり、事務室内からも利用者の動きを見ることができるようにしてある。少ない人員で利用者に対応するための工夫である。事務室内の備品は、ほとんどすべて旧図書館時代のものを使用している。

次に、全体にかかわる部分について述べたい。

(12) サイン

書架は資料の移動が多く、見出しの頻繁な変更が予想されたので、簡単に表示替えが出来るよう、紙を差し込めるような透明ボードを取り付けた。

館内案内図などは業者へ注文するとかなり高額なものになってしまうので、一部を除いて手製のものが多い。

(13) 色彩

図書館は機能的であることは言うまでもないが、居心地の良い空間であることも大切にしたいので、室内の色彩を出来るだけ少なくし、全体に落ち着いた雰囲気になるよう心がけた。

茶と緑を基調とし、床面は旧校舎の雰囲気を残すダークブラウン、机や椅子、書架の側板は木目をそのまま活かした薄茶、書架の棚板と椅子の布地は窓枠に合わせた緑にまとめた。

(14) 空調

図書やビデオといった資料は湿気に弱く、書庫部分に関しては特に除湿機能を強く希望したが、通常の冷暖房での対応となった。

省エネルギーを考え、各ゾーンでの温度の調節がきくように4つに分けた。スイッチはカウンター内にまとめ、一箇所ですべてコントロール出来るようにしている。グループ学習室などの部屋は独立したものにしている。

(15) 照明

照明に関しては、その設置位置と家具との関係性に特に気をつけた。書架と書架の間に照明がくるよう、

また閲覧席上では利用者の影にならない位置になるよう依頼した。図面上では希望が入れられたが、実際の出来上がりでは少しずつずれているところもある。実施設計が必ずしも設計図面通りにいかないという例である。

照明も省エネルギーを考え、より細かくゾーンごとに分けてある。スイッチは各階のカウンター内にまとめた。

内部の細かな点についての反省は各スペースの項でも述べたが、全体に関わるものとして、もう一つ換気の問題がある。2階のテラスに面する窓は全面ガラスになっており開閉できないため、入口を開けても風が通り抜けず、換気がうまくいかない状況である。

実施設計の段階でも細かな指定をし、図面上や数回の『見学』の際にもかなり注意して見ていたつもりだが、立体的な空間を考えるということはなかなか難しく、専門家のアドバイスが得られれば良かったと感じている。

VI. 理念の象徴

さて、次に本学のシンボルとして、図書館入口正面を飾るプレートや聖句、また、ステンドグラスについて現在の形を整えるまでの経緯にふれてみたいと思う。

<聖句とブドウのガラス細工>

図書館正面入口左手に金のプレートに刻んだ聖句がある。本学の理念を表すもので、新約聖書の「ピリビ書」第1章9節からの引用であることは前掲した。

「わたしはこう祈る。あなたがたの愛が深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり……」これは「……それによって、あなたがたが何が重要であるかを判別することができますように……」と続くのだが、この部分はプレートには刻まれていない（新約聖書の口語訳1954年版）。

経緯

一つの作品が出来上がるまでには、背後に様々な曲折があるものである。本学の故榎垣教授は、生前、この正面入口のデザインと聖句の選択（それからナイティンゲールのステンドグラスも）について、あれこれと構想を持っておられた（詳しくは「学園ニュース」榎垣マサ先生の追悼号を参照）。

聖句は日野原学長と故人とが最終的に決定。同句と、上記の日本語訳を、プレートに入れることは決まっていた様子であったが、これをフロント上部にステンドグラスで刻む予定であった。ラテン語を使うのか、ギリシャ語にするのかは決まっていなかった。

2つの句を花文字にしてキリスト教のシンボルのブドウの図柄の間に入れこむようにということは、制作者、鈴木幸江氏（本学卒業生）と、共同制作者の戸田倫子氏に伝えてあったようである。花文字ならば、ラテン語の方が芸術的であるし、キリスト教精神に基づく学問の場には、ラテン語が適当と思い、筆者のひとり、助川もそう申し上げた。どこでセンテンスを切るかは、ラテン語の専門家の所へ出向きアドバイスを戴いていた。

caritas vestra magis ac magis abundet in scientia
et omni sensu（ラテン訳－ウルガタ訳）

これをブドウのデザインの中に入れて……という希望を残したまま、榎垣先生は、1994年1月、2年半後の完成を待つことなく、召天された。もちろんナイティンゲールのデザインも決まっていなかった状態であった。現在のデザインに至るまでにいろいろなことがあり、チャプレン、建設委員会、建設担当者、制作者、図書館を含む会議が何回か開かれた。

聖句を花文字で踊らせるのはどうか、分からないラテン語より英語ではという強い意見も出された。本学合理主義精神の影響か、本学が聖公会であるからなのか（ちなみに榎垣教授はカソリック信者であった）。

And this is my prayer, that your love may abound
yet more and more in knowledge in all judgement.
（英語の欽定訳 King James Version－1610年）

And this is my prayer, that your love may grow
ever richer in knowledge and insight of every kind.
（英語口語訳－1989年）

チャペルや、聖書図書館に出向き、英語訳の場合は、欽定訳が一番正統であることが分かった。制作者には、再度修正し、字が踊らないデザインを出してもらった。

しかし、紆余曲折の挙げ句、現在のように聖句は日本語をプレートの上に、ブドウの図柄は旧校舎の入口ラウンジの欄間にあった木彫りのブドウのデザインをコピーして、プレーンなガラス細工となって納まった。

ここに至るまで本当に色々なことがあった。なぜ、そう簡単にいかなかったか、普通の方は不思議に思われることだろうが、故人が急逝したことにつながる事情や、カソリック、プロテスタントという、宗派上のこともかかわっていたのだろうか。

<ナイティンゲールのステンドグラス>

次に、3階への階段踊り場、左上方のナイティンゲール

ルのステンドグラスは、故檜垣教授の寄贈によるものである。正面のデザイン以上に思いを注ぎ、時間をかけて、デザインに必要な資料を集めておられたと聞いている。アメリカのワシントンDCにある、アメリカ・ユニバーシティの礼拝堂にあるナイティンゲールのスライドは、大切な資料モデルとして、もう10年ほど前に、本学の客員教授であったトニ・ハリントンに頼んで取り寄せたものである。

故檜垣教授は聖路加で戦前の教育を受け、ナイティンゲールのフィロソフィーにも造詣が深かったのは当然のことといえよう。ちなみに1960年（昭和35年）1年間のニュージーランド留学には、折しもナイティンゲール没後50年祭で、本国英国より伝統の色濃い同地の看護教育は、ナイティンゲール一色で改めてその教育に接する機会を得たと聞いている。

故人は、ここで述べるまでもなく、基礎看護の担当で、看護史も極め、40年間奉職し、本学の生き字引にも等しい存在であった。聖路加国際病院そして聖路加看護大学で、戦前の教育や実習を受け、建学の精神を身をもって体験。多くの学生に影響を与え、戦後は指導者として看護教育に携わり、看護の自立と発展に貢献した。本当に広範囲にわたる読書家で教養の高い看護教育者であった。1980～89年まで本学図書館長も兼任、新図書館への思いは計画スタート以前に10年間心に暖め、わがことのように強い情熱と抱負を持っていた。

立派な作品が出来上がるには、それに対して一人の人間の強い思い入れというかスピリットが不可欠であることを痛感した（学園ニュース215号、1994、図書館の紙細工参照）。

今や、全国で学部数50余、修士課程14、博士課程6が設立され、看護界は、やっと「光」が当たって一人立ちし、輝きははじめた。その看護を志す人々に、“Fiat Lux”（光あれ）（創世記章3節）と、故人は祈りを込め、この句を選ばれたのだろう。

日野原学長が選ばれた“Science & Art”ということばは、ナイティンゲールの看護の理念を反映している。あのように美しく出来上がり、全関係者が幸せに感じているが、今思えば、ステンドグラスに関しては、正面入口のデザインとともに「ステンドグラス物語」が書けるほどいろいろなことがあった。ステンドグラスは、自然の光を受けて、はじめて様々な彩りを発揮するものである。「自然」あつての命。「自然」Natureは超自然なものに通じ、それはナイティンゲールがそのフィロソフィーの中で、大切に考えたものである。したがってこの作品の設置場所も「人工の光」でなく「自然の光」を受けて輝くように設計されたことは忘れてはならない。

VII. あとがき

以上のように、新図書館は大学の理念に基づき、聖路加看護大学図書館のめざすものの、構想を練り、その構想を具現していったという、誠に緻密で正統的な経路を辿ったわけである。色々と問題のある点もあるが、全体としてはかなり満足のゆくものが出来たのではないかと思う。

その要因をいくつか挙げると、まず一つには、利用者の要求や資料の状況を良く知っている現場の図書館員が検討に参加できたこと。二つ目には、大学組織内で図書館館長が対外的な交渉の窓口となり、リーダーシップを発揮したこと。三つ目には、建築担当理事であった故檜垣教授とそれを引き継いだ常葉教授が図書館の要望を良く吸い上げ、大学の全体計画にうまく盛り込んでいくくれたこと。四つ目には、日野原学長を筆頭に教職員全員が図書館を重要なものと考え、全学的にバックアップしてくれたこと。五つ目には、聖路加国際病院や同窓会をはじめとする多数の方々からの寄付による財政的支援などである。

施設の実際の検討が始まってから6年以上をかけて新図書館が完成した。今後は、問題があるところも運用の上でカバーし、先駆的な看護図書館としての自覚を持ち、他の図書館とも密接な連携のための協力体制を整え、看護の発展のため役立つ図書館でありたいと考えている。

参考文献

- 1) 亀山美智子：聖公会と聖路加女子専門学校、近代日本看護史、ドメス出版、1985.
- 2) 木村登紀子：図書館って、何だろう？、学園ニュース、178号、1991.
- 3) 建築思潮研究所：図書館2—マルチメディア時代の読書空間（建築設計資料43号）、建築資料研社、1993.
- 4) Cohen, Aaron; Cohen, Elaine：図書館のデザインとスペース計画、丸善、1984.
- 5) 私立大学図書館協会東地区部会研究部視聴覚資料研究分科会：'89AVブースカタログ—大学図書館における視聴覚資料閲覧席の事例研究2、1989.
- 6) 助川尚子：聖路加看護大学の新図書館—過去、現在、そして未来—看護図書館協議会会報 7(1)、1997.
- 7) 助川尚子：故檜垣マサ名誉教授追悼号、学園ニュース 215号 1994.
- 8) 常葉恵子：故檜垣マサ名誉教授追悼号、学園ニュース 215号 1994.
- 9) 図書館計画施設研究所：私の図書館建築作法—鬼頭梓図書館建築論集 付図書館建築最近作4題

- (LPDシリーズ3), 図書館計画施設研究所, 1989.
- 10) 図書館計画施設研究所: 図書館建築は, いまー図書館建築1982, 1983 (図書館計画施設研究所紀要第2集), 図書館計画施設研究所, 1984.
- 11) 図書館計画施設研究所: 図書館建築22選, 東海大学出版会, 1995.
- 12) 図書館情報学ハンドブック編集委員会: 図書館情報学ハンドブック, 丸善, 1988.
- 13) 日本学校保健会: 学校保健の動向 平成5年度版, 東山書房, 1993.
- 14) 日本建築学会: 単位空間Ⅲ (建築設計資料集成5), 丸善, 1980.
- 15) 日本建築学会: 建築-文化 (建築設計資料集成7), 丸善, 1981.
- 16) 日本図書館協会: 図書館関係法規基準集1983年版, 日本図書館協会, 1983.
- 17) 日本図書館協会施設委員会: 家具とサインー図書館施設計画マニュアル (シリーズ図書館の建築2), 日本図書館協会, 1984.
- 18) 檜垣マサ: 建学の精神を生かした看護教育, 看護40 (10) 1988.
- 19) 檜垣マサ: 図書館のことについて 学園ニュース 78号 1980.
- 20) 菱沼典子: 聖路加看護大学ー看護教育のパイオニアとして, 看護, 48(7)1993.
- 21) 母良田功: 大学の移転と図書館建設, 薬学図書館, 36(1), 44-50, 1991.
- 22) 湯楨ます他: ナイティンゲール著作集 第Ⅱ巻, 現代社, 1992.

英文抄録

The Fundamental Concepts Realized in the Planning and Constructing of the New Library of St. Luke's College of Nursing

Hisako Sukegawa Toshie Roppongi

Abstract

This paper presents how the new library, completed in the new school building in August 1996, came into being. The fundamental concepts formulated for planning and constructing the library reflect the philosophy as well as the educational development of St. Luke's College of Nursing.

Key words

new library, library construction, educational philosophy, fundamental concepts
